

魂神楽

みたまかぐら

神々の魂は荒魂と和魂という陰陽両面の魂を持つとされ、荒魂とは神々の荒ぶる魂、和魂は優しき魂とされる。この世に災いが起こるのはこの荒魂に拠るところであるともいわれ、岩戸隠れはスサノオの荒む荒魂によって、アマテラスのまた荒魂もまた呼応してこの世に闇が訪れた。とも受け止めることが出来る。神々の荒ぶりは天変の災いであり、これによって生まれた人々の悲しみを、アマテラスは一人岩戸にて引き受け、スサノオは一人で荒みさすらったのではないか。

この荒魂を鎮めるのが人々の祈り、また、悲しみから立ち上がることが願いであり、天に、神へと悲しみの中から立ち上がるそれが岩戸の前でアメノウズメが舞う祈りであり、簸の川で生贄を捧げる願いなのではないか。その祈り、願いが天へと通じる事によって、神は和魂となり、世に安寧が訪れるのではないだろうか。神楽とは荒魂をいやししずめるという側面もあると思う。それは、役行者によって始まる山伏が各地の荒魂を鎮める為に山々を巡ったというところに起源をもつと言われていることもあるからだ。

現在の世界は、荒魂によって天災疫病が流行し、人心は荒みつつある。時流の潮目の変わり目にあるように思う。今、この時、古来陰陽の境となった加茂川の畔に於いて、荒魂を御魂として祀り、それを神楽によって鎮め、世の人々に幸福をもたらすことを願って、本公演を行いたいと思う。

物語

神代の時代、高天原を統治した天照大御神(アマテラス)、その弟神で海原を守護任されていた須佐之男命(スサノオ)は幼き頃より父神(イザナギ)、母神(イザナミ)親神の情愛に触れず成長した。須佐之男命は黄泉の国の亡き母神を想い、海原を治めることなく高天原の天照大御神を訪ね、天の安の河原にて誓約を勝ち取った須佐之男命は驕り、数々の悪行を行う、天照大御神は悪行の止まない事を自らの責任であると痛く嘆かい、天の岩戸へと引き籠るのだった。

一方、高天原を追放された須佐之男命は、各地を転々とし出雲国斐伊川にたどり着く、この土地には古より八つの体を持つ八岐大蛇が住み、人々は毎年の美しい姫を生贄として差し出さなければならなかった。それを聞いた須佐之男命は、強い酒を造らせ、その甕の中に姫の姿を映し、大蛇が姫を飲み込まんと酒を飲み、酔い伏したところを十束の剣で退治した。大蛇を切り裂くと尾の中から一振りの御剣を見付け、この剣を天の叢雲剣と名付けた。須佐之男命は自らが起こした高天原での悪行に涙をなし、天の叢雲剣を姉神 天照大御神へと捧げると、天地は平けく目度く治まり、人々は神々と共に喜びを舞い上げるのだった。

この作品は、石見神楽の「岩戸」「大蛇」を中心に、須佐之男命が荒ぶり、天照大御神が岩戸にかくれるまでを尾上菊之丞の舞踊、竹本織太夫の語り、吉井盛悟の演奏にて表現し、「大蛇」では、石見神楽の華麗で勇壮な舞を融合。フィナーレの舞い上げは出演者総出演の大団円となる、石見神楽と古典芸能が織りなす新たな創造の舞台です。

出演者プロフィール

益田市石見神楽神和会

島根県益田市で、明治以降神職から神楽の伝統を受け継ぎ、崇敬の篤い氏子達が会をなしている、石見神楽の各会、団体の発展や継承、後継者育成等を目的として集い、平成4年に「益田市石見神楽神和会」が市内9団体にて発足。市町村合併を期に14団体に。第44回歳末助け合い石見神楽共演大会を毎年開催、数多くの市外・県外公演に加え、近年はサウジアラビア・アメリカ南部・中米5ヶ国での海外公演を行う。令和2年「神々や鬼たちが躍動する神話の世界～石見地域で伝承される神楽～」として日本遺産に認定。現在は、12の団体で活動しており、日本の伝統芸能として石見神楽の普及に努める。

竹本織太夫

豊竹咲太夫に入門、豊竹咲甫太夫を名乗る。10歳で初舞台を踏む。NHK Eテレの「にほんごであそび」にレギュラー出演するなど、文楽の魅力を幅広く発信。2018年1月、八代目竹本綱太夫五十回忌追善・六代目竹本織太夫襲名披露公演において、六代目竹本織太夫を襲名。第28回咲くやこの花賞、第34回松尾芸能賞新人賞、平成25年度大阪文化祭賞グランプリ、関西元氣文化圏賞ニューパワー賞、第38回国立劇場文楽賞文楽優秀賞など、受賞歴多数。

尾上菊之丞

尾上流四代家元。流儀の舞踊会をはじめ「逸青会」(狂言師 茂山逸平氏との二人会)、古典芸能オンラインサロン「K2 TEATRE」(藤間勘十郎氏と共同)を主宰。日本舞踊界初の全編ロケによる映像作品「地水火風空そして、踊」を作・演出。高橋大輔主演のアイスショー「LUXE」では監修・演出を勤める。振付師としては「風の谷のナウシカ」、スーパー歌舞伎Ⅱ「ワンピース」等、新作歌舞伎を手掛ける。

吉井盛悟

笛・太鼓・胡弓奏者。作曲、演出家。青年期より日本の民俗芸能のフィールドワークに励む。2003年、佐渡に渡り「鼓童」に参加。2013年独立。和楽奏伝主宰。文化人類学的視点で日本音楽を捉え、国内外、ジャンルを問わず自由な音楽芸術活動をする。

石見神楽とは

島根県西部の石見地域で演じられる神楽のことです。その由来は古く、平安末期から室町時代に石見一円で、農耕神楽的なものとして村々に祀られる集落の神「大元神」を信仰した田楽系の行事が原型と言われています。江戸時代には出雲佐陀神楽が、歌舞伎や能の所作と融合させた神話劇の神能を演ずるようになり、その佐陀神能が爆発的に石見に波及され演劇化されていきました。明治の法律改正により、その土地の人々が神楽を演舞するようになる、リズムは旧来型の六調子の他に、活発な石見人の気性そのままに勇壮な八調子とよばれるテンポになるなど、改革も活発化し、現在は古事記や日本書紀を原典とするものなど演目も30数種にのぼりスケールも大きくなっています。「神事」でありながらも「演芸」的要素が濃く、ストーリーも明解。舞もお囃しも激しく、胸のすくような爽快さと勇壮さがあるのが特長です。

Masudaカグラボ 京都公演実行委員会とは

島根県益田市の石見神楽の保存と活用に向けて、将来ビジョンの計画と実行を行う民間団体「MASUDAカグラボ」を母体とした、京都公演を実施するための組織。益田市では、令和2年度に「MASUDAカグラボ(当時: IWAMIカグラボ)」が結成されて以降、従来の石見神楽関係団体だけではなく民間主体の動きが芽生え始めている。今後は、益田市内だけではなく、全国を舞台に石見神楽の魅力を引き継いでいく。本公演は、まさにそれを象徴するイベントである。

